Hello!

STAFF

CARE International Japan
スタッフ紹介

013
財務・総務部
総務・人事 / 個人寄付担当
秋田 真千代

▲「収集ボックス」を手にして説明。この「収集ボックス」の型は、当財団の HP からダウンロードすることができます

元々は保育者だったのですが、縁あって途上国、そして NGO に巡り合い、今に至ります。当財団の前は、地元愛知で 10 年、東京で 2 年、別の団体にいました。いずれの団体でも、国内活動担当で会員寄付者管理、ボランティアコーディネート、ツアー及び行事企画運営、広報誌作成等を担当していました。現在は、総務・人事を担当しておりますが、慣れないことが多く手間取っている毎日です。また、「あつめて国際協力」で、どうすれば多くの人々に知ってもらえるのかを考えており、出かける時のかばんの中にはいつも「あつめて国際協力」のチラシを入れています。
最近、「国際協力って何だろう？」と聞かれたときには、「寄り添うこと、支えること」と答えるようにしています。上から引っ張り上げることもできないし、下から持ち上げることもできないし（そもそも、どちらが上で、どちらが下なのだ？とも考えますし）。変わりたい時が変わる時、そんな時に人々に寄り添い、支える自分でありたいと思っています。

事務局からのご連絡

「ネパール地震緊急募金」へのご協力ありがとうございました

地震の発生からおよそ 2 カ月。これまで 260 件（総額 2,444,877 円、2015 年 6 月 1 日現在）のご寄付を個人や企業・団体の皆さまからいただきました。この場をおかりしまして、皆さまの温かいご支援に心より御礼申し上げます。

被災地は、既に雨期に入っており、家屋の再建が急務となっています。CARE は、発生直後から、最も被害の大きかったゴルカ地域で、防水シートなどの緊急支援物資を配布。現在は、家屋の再建に向けて、技術者を雇ったり、建材やその他再建にかかる費用に充てるための現金支給などを行っています。CARE はこれからも、被災者に寄り添いながら、復興までの道のりを中長期的に支援していきます。引き続きまして、緊急募金へのご協力をよろしくお願いいたします。

「第 3 回日経ソーシャル・イニシアティブ大賞」を受賞しました

当財団は、味の素株式会社と公益財団法人プラン・ジャパンとともに、ガーナにおいて栄養改善に関わるソーシャルビジネス事業を展開しています。今般、「第 3 回日経ソーシャル・イニシアティブ大賞」に共同で応募し、栄えある大賞を受賞しました。当財団は、「社会課題の解決」と「ビジネスの採算性」というソーシャルビジネスの両輪を確実に実現すべく、また本大賞に恥じない成果を収めて参りたいと、一同決意を新たにしております。

(C)2015 NIKKEI INC. All rights reserved.
◀他の受賞者とともに登壇する五月女理事長（右から 4 人目）

個人支援者専用ダイヤル TEL：03-5944-9931

公益財団法人　ケア・インターナショナル ジャパン

〒171-0031 東京都豊島区目白 2-2-1 目白カルチャービル 5 階　TEL：03-5950-1335　FAX：03-5950-1375　E-mail：info@careintjp.org
Website：www.careintjp.org　Facebook：www.facebook.com/CAREjp　Twitter：https://twitter.com.CAREjp

※ 小誌へのご意見、ご感想を募集しています。発行元までお寄せ下さい。
※ このニュースレターのデザイン・レイアウトは、CARE のデザインボランティアの古野真菜実様のご協力により、制作されています。

ケア・インターナショナル ジャパン　ニュースレター　CARE World Vol.29　2015 年 6 月 30 日発行　発行人：五月女 英介　編集：甲斐 博子

CARE World

Vol. 29
ケア・インターナショナル ジャパン
Newsletter
June 2015

変える、女性も女子も活躍する豊かな世界に

国際協力 NGO「CARE」は、1945 年から 100 カ国以上で人道支援活動を実施してきた世界最大級の国際協力 NGO です。
日本事務局である当財団では、主にアジアやアフリカにおいて、災害時の人道支援を行うとともに、「女性と女子」に焦点をあてた活動を通して、最も困難な状況にある人々の自立を支援しています。

Contents

page 1　「CARE パッケージ」70 周年によせて
page 2-3　ケア・インターナショナル ジャパンの歴史
page 4　スタッフ紹介 / 事務局連絡

「CARE パッケージ」70 周年に寄せて

CARE の 70 年にわたる長い歴史の中で、「5 月 11 日」は記念すべき日です。1946 年 5 月 11 日夕刻、フランス北西部のル・アーヴルという町の船着き場に、米国からのある贈り物が到着しました。第二次世界大戦で大きなダメージを受けたこの港に荷揚げされたのが、「CARE パッケージ」でした。

戦後のヨーロッパを支援するために、1945 年 11 月に米国の 22 の団体が協力して設立したのが「CARE」です。この名称は、The Cooperative for American Remittance to Europe（対欧送金組合）の略であって、英単語の「care（配慮、介護などの意）」から来たものではありません。設立時の団体の中には、今でも CARE と世界各地で協力する国際的な NGO も含まれています。Catholic Relief Service、Church World Service、International Rescue Committee、Save the Children（Federation）などです。

「CARE パッケージ」運動は、米国の市民がヨーロッパの知り合いや親せきのために CARE に寄付をして、CARE が食糧、衣類などの生活必需品が詰められた「CARE パッケージ」という箱をヨーロッパの被災者に送るというものでした。なかには、戦前にイタリアでお世話になったタクシー運転手に「CARE パッケージ」を送りたいという米国人のために、CARE がその運転手を見つけ出して渡すというケースもありました。

「焦土と化した日本に、子ども達の飲むミルク、身につけるセーターが、毎月毎月、米国の市民から届きました」と安倍総理は米国連邦議会上下両院合同会議で演説しました（「希望の同盟へ」（2015 年 4 月 29 日（米国東部時間））。これこそまさに、当財団が発足する礎となった「CARE パッケージ」です。これは戦後 70 年の歴史の一部です。この貴重な歴史をお伝えする機会を作っていきたいと思っています。これからの配信を楽しみにしていてください。

（常務理事・事務局長　武田　勝彦）

「CARE パッケージ」から始まった ケア・インターナショナル ジャパンの歴史

当財団が発足する礎となった「CARE パッケージ」。1948 年（昭和 23 年）から 8 年間にわたり、1,000 万人の日本人が支援を受けました。毎月、米国市民の善意が郵便局から届いた時代がありました。開けてみないと中に何が入っているのかわからない福袋のような小包には、無駄なものは何一つ入っていませんでした。

日本に届けられたもの

「CARE パッケージ」は、郵便局の窓口で受け取る方式でした。これは、物資を必要としている人たちに直接かつ確実に届けるために CARE が考えた方法でした。

当時、日本に届けられた「CARE パッケージ」は、乳児向け、幼児向け、標準食糧など発育段階に応じて分かれていました。また、缶詰類が入っている場合は缶切りも同封されているなど、細かい配慮が見られました。

標準的な食糧類の例を挙げると、全脂粉乳、チョコレート、干しぶどう、小麦粉、砂糖、ベーコン、マーガリンなど。それ以外の生活必需品については、石鹸、木綿生地、シャツ、毛布などがありました。さらに、医療器具、大工用具、左官工事や電気工事のための道具や資材、農作物の種子や農具なども多数送られてきました。

食糧や衣類などの緊急物資に加え、道具や資材が送られてきたことで、職業訓練の実施や技術者が就業できる環境作りが可能となり、日本人の経済的自立に大いに役立ちました。これが、今日の CARE が活動を通して実践している「自助努力の支援と持続的発展」の先がけをなす精神です。

▲ 郵便窓口で「CARE パッケージ」を受け取る母娘

さらなる発展を見せるCARE の支援

1949 年（昭和 24 年）に入り、CARE は日本全国の小学校を対象に、学校給食用の脱脂粉乳の供給も開始しました。当時の発育盛りの子どもたちに、脱脂粉乳を唯一の栄養源として安定的に摂取させていくための学童向け食糧支援事業の一環でした。

また、国会図書館に対して 1,000 ドル相当の医学書や科学書を寄贈、さらに明治学院大学、津田塾大学などの教育機関や公共機関にも書籍を贈りました。その後、一般にもその対象を広げ、家庭内でも絵本などの図書を自由に手にすることができるようになりました。

こうした 8 年間にわたる CARE による支援活動は、日本が経済復興の兆しを見せた 1955 年（昭和 30 年）12 月 30 日にその幕を閉じました。

▲ 中に何が入っているのか子どもたちは興味津々

▲ 子どもたちに「CARE パッケージ」をお配りになる高松宮妃殿下

現代もなお、CARE の活動に息づく「CARE パッケージ」の精神

現代の「CARE パッケージ」には、米国製のミルクもセーターも入っていません。今日では、CARE の援助物資は、途上国の自国経済を助けるために、極力、現地あるいは周辺国で調達しています。そして生活様式や宗教・文化へのよりきめ細やかな配慮がなされ、ますます多様化しています。

さらに、現代の「CARE パッケージ」は、その形態や規模も様々です。CARE は、援助物資の配布に留まらず、より良い教育へのアクセスを提供し、持続可能な農業を促進し、村人による貯蓄貸付組合への参加を通じて家計所得の向上を支援しています。

現代の「CARE パッケージ」は、70 年前のそれとは“中味”は違えど、当時のパッケージに詰められた“精神”は今も強く息づいています。

私も「CARE パッケージ」を受け取りました

湯川 れい子氏
音楽評論家・作詞家

脱脂粉乳のミルクや、ビスケットなどが入っていた茶っぽい布製の「CARE パッケージ」を頂いた記憶があります。
決しておいしくはなかったけれど、見知らぬ誰かの温かな想いは、確かに胸に届いていました。
そして今の私の支援活動の糧になったと思っています。

（ニュースレター 22 号から転載）

▲「CARE パッケージ」に入っていたチョコレートをほお張る子ども

▲「CARE パッケージ」は戦争孤児にも届けられました

▲「知る」ことは生きるチカラを身につけること、この精神は今も受け継がれています